

開催地名	埼玉県 吉見町
開催日時	令和7年9月21日（日）10：00～11：30
開催場所	吉見町民会館フレサよしみ（小ホール）
語り部	大内 幸子（宮城県仙台市）
参加者	地域の自主防災組織・町の防災担当職員 44名
開催経緯	本町では年数回の自主防災組織リーダー養成講座を行っていますが、実際に大きな被害を受けたことがないため、災害に関する知識・経験のある方の講演を聞くことにより、災害に対する危機意識の低下の改善や、地域で行う自主防災活動・家庭内での災害時対応の重要性の周知を目的とし、開催いたしました。
内容	<p><b>■講師紹介</b></p> <p>大内氏は、仙台市地域防災リーダー（SBL）、福住町町内会副会長兼防災・減災部長、せんだい女性防災リーダーネットワーク代表、仙台市国土強靱化地域計画アドバイザー（R1年～R3年）等、幅広い分野で活躍されている。また、小・中学校及び大学での防災講演や総務省消防庁の要請による「防災意識向上プロジェクト」の語り部として、全国で講演を行っている。</p> <p>2011年の東日本大震災や令和元年度の台風第19号などの際には、町内会の皆さんの避難誘導や避難所運営などに携わり、実災害においても多くの知見をお持ちしておられる。</p> <p><b>■あの日のこと</b></p> <p>・昭和61年の台風による被害</p> <p>福住町では、昭和61年8月5日に台風10号による被害を受け、全戸が床上・床下の被害を受けた。当時はまだ、自主防災組織はなく、避難所運営もなかった。このような、大きな被害経験から、防災意識の向上、地域の防災活動が活性化された。</p> <p>・東日本大震災による被害</p> <p>2011年3月11日14時46分に発災した東日本大震災では、福住町でも被害を受けた。普段の訓練通りに動くことができたため、安否確認や住民の避難誘導、避難所の開設等、迅速に行動することができた。中学生との訓練も行っていたため、中学生らが水汲みや小学生たちの面倒を見るなどの手伝いを行ってくれた。避難所運営委員の大半が男性だったため、この経験から女性の視点を入れた避難所運営について現在につながるきっかけとなった。</p> <p><b>■福住町の防災・減災の取り組み</b></p> <p>数々の災害経験から、自分たちの町は自分たちで守るという考え方が生まれた。行政に頼らずに出来るだけ地域力で災害対策を行うこと、行政には地域力では出来ない行政にしかできないことを行ってもらおう。</p>

多くの水害と地震に見舞われてきたこの経験が、「福住町方式」を生み出す大きな原動力となった。

#### ■震災の教訓からの取り組み

東日本大震災後、自主防災組織の必要性和重要性に気づき、地域の防災力を強化するようになった。取り組みとしては、避難所である小学校の備蓄倉庫を1階から2階へと移動、災害時給水栓の改良。災害時に、水が出ないことの辛さも語っていた。

#### ■災害時の自助・共助の重要性について

災害の規模が大きければ大きいほど公助には限界がある。そのため、自助・共助の取り組みが重要となる。日常の取り組みや訓練を行うことにより、専門的な知識を蓄えられていると、災害時に行動できる。

#### ■多様性のある避難所運営について

震災後の避難所運営に関する変化では、女性の視点や配慮が求められる場面が多く、多様な視点を取り入れた防災計画が必要と感じた。

#### ■自然災害に備えて

災害が起きたら自分の身を守り逃げ道の確保を行う。(玄関・窓を開ける)

慌てて避難するのではなく、ラジオ・テレビから情報を集める。その後、避難が必要な場合にはブレーカーのメインスイッチを落とし、防災グッズを持ち避難する。自宅が被害を受けていない、上の階が安全なのであれば自宅避難の方がよい。

#### ■まとめ

- ・出来るだけ行政に頼らない地域力。
- ・備えや準備・取り組みをしている事は災害時のリスク削減に繋がる。
- ・防災は日常生活そのもの。様々なイベントや活動があって防災の取組が活性化する。
- ・常に防災の事を考えていると不安になるばかりなので日を決めて「防災の日」として防災の事を考える日を設けるほうがよい。



開催地より	<p>災害経験に基づく避難所問題や、女性視点の問題点の講演を聞き、女性が積極的に防災に取り組んでいく良いきっかけとなりました。写真も多く使われていて、分かりやすかったという意見も多く出ていました。</p> <p>主催の吉見町職員も災害の実体験のお話や地域で行っていることを聞くことができ、新たな知識等を学ぶことができたため、これからの参考にしていきたいと感じました。</p>
-------	---